

〔翻訳〕

ギルバート・バーネット 著

ロチェスター伯の生涯<sup>(1)</sup> (上)

生 田 省 悟 訳

序

故人に讃辞を呈するというのは古来頻繁に行なわれてきた習わしであるがため、今日では陳套極まりなく、しかもこれにつきものの追従のお陰で全く胸の悪くなる代物に成り果ててしまっている。従って、追悼の辞や賞徳が偽りなき真実を伝えていくか否かといった出所の正しさよりも、むしろその表現の見事さや機知の明敏さなどに重きが置かれてしまっているのも別段驚くべきことではあるまい。だからといって、この故人を讃えるという主題に手を染めるのを私は控えようとも思わないし、却って能う限り率直にこれを行なってみたいと考えている。その際は借り物の文飾一切なしで、私自身が見聞したことのみを伝えるべきだろう。簡単に予測できることだが、定めし多くの人が己の不敬な処生訓や不埒な行状を弁護すべく、私の書くところを誘るに違いない。また、このようなことは牧師という私の職務に由来する行為だと非難する者もあるはずだ。

世人の好んで言うところの「坊主の商売」を営むため、私がこの著述を行なったのだと思ひ込む者も非常に多いはずなのだから。或いは余りにわざとらしく飾り立てていると思う者もいれば、余りに明け透けな裸同然の形で提示していると思ふ者もいることだろう。

だが真実という厳格な規範に則って我が身を律する決意をした以上、私を受けるであろうどのよさうな非難も気に掛けるつもりはない。「告発の秘密」とまでは言わないにしても、友情に基く信頼を前提にしていなかったら、故人の打ち明けたこんなにも多くの事柄を公表するのは全く異例の事態だと思われることだろう。然しながら、このロチェスター伯という貴人は死の数日前、病床に侍っていた私をそうした類の束縛から解放してくれたのみか、生きていた者に資すると思われる場合は彼自身について容赦なく記すようにとの責務を託したのである。しかも末期の生活態度だけでなく、生涯における最悪の部分までもが曝け出されたとしても気分を害ねたりはしないと云ってくれたのだ。彼は心から悔い改めていたので、他人に役立つのなら、己の過ちを明らかにされることさえ吝かではな

かった。

本書を執筆するに当たって、私には大きく不利な点が一つある。

即ち、彼の主たる目的を私が達成するには、どうしても彼の過ちの幾許かに触れなければならぬのだ。しかし事情の許す限り、これには出来るだけ穏やかな形で触れておいてある。従って、もし彼にそれをどう扱うつもりなのかを語り得たとしたら、彼が同意した、或いは望んだであろう筆致以上に穏便に書いておいたはずだと確信している。私は彼と係わりを持っていた人々について、私自身の個人的な考察と結び付けて述べたりはしていない。そうした人々が私の著述を通して非難を蒙ったりするよりはむしろ、かつての行ないに対してローチエスターの抱いていた想いを考えてもらうことで、彼ら自身の乱行を差し控える結果が得られればと願ったからである。ローチエスターは自身の生活について殆ど隠し立てをしなかったが、その多くの部分に他人が関与していた以上、私は直接彼に関係すること以外を述べるつもりはない。彼の過去についても、彼の悔悟を説明する材料となるもの以上のことには言及すべきでないと思っている。

ローチエスターの殊の外の知遇を得たきっかけは、彼が私との面会を求めている旨の連絡を彼の知人のさる貴族から受けたことである。これは一六七九年十月の話で、その頃彼は大病から徐々に回復しかけていたところだった。彼は前の夏に亡くなったさる人物に私がいざいざ仕えていたことを承知していた。また当時彼はそうした体調にありながら、出版されたばかりの私の『英国宗教改革史』第一部を読んで興味を持ってくれたらしい。それまでも二、三度顔

を合わせたこともあったりしていたので、そうした事情から私に声を掛けてくれたのだ。一度か二度私が出向いた後、彼は打ち解けてくれた様子で、宗教と道徳に関する想いを洗いざらい披露することとなった。のみならず、過去の生活振りまでをも明確に示してくれたのである。度重なる私の訪問にも気を悪くはしなかったらしく、四月初めに彼がロンドンを離れるまで私は頻繁に彼の許に侍ることになった。病状が思わしくなく、過去を振り返ってひどく胸を痛めていると聞いて書簡を認めたら、折り返し返事をもらったことさえある。これは、私の知らぬ間に彼の召使いが写しを印刷所に持ち込んだので活字になってしまった。<sup>(3)</sup> その中には私に対する過大な評価が述べられていて、私自身がそのような内容を公けにしたら不謹慎の極みだったろう。だが、そうした賞め言葉を書いたのも、彼自身の慇懃さと育ちの良さの為せる業だったと思われる。私をそれほど評価してくれたのも、彼には他の聖職者と殆ど面識がなかったからだけのことには違いない。

私の著述の目的は、彼の託した最後の指示を果たすべく、過度の淫蕩に耽る者を目覚めさせる一助になればということである。そして、放縱な生を駆け巡った一つの凄まじい実例によって、欲望と情欲から生じる熱の只中にある人々が少しは心を動かされるのではと願っている。なにしろソロモンが己が身について言っているのと同様に、「彼の眼が望むものは彼これを禁せず、彼の心の悦ぶものは彼これを禁せざりき」というほどだったのだ。だが、時間と活力を全て費す原因となってしまうものを振り返る時、彼はそれを精神の虚飾と病に過ぎないと見做したのである。恐らく今日のリベルタ

ンの誰にもまして、彼は生来の才知と学問による知を兼ね備えており、しかもそれを思考と研鑽によって大いに高めたのだ。然しながら、良き想いで心が啓発されるよりも以前の生活を省みて、彼はそれが狂気と愚行に他ならなかったと裁断した。宗教の力に動かされるにつれ、そうした生に対しては侮蔑に加え、まさに真摯な悔悛者として嫌悪の情さえ抱くようになっていった。その上、非常に明瞭かつ穏やかに胸の内を述べ、創り主と贖い主に対する己の科をわきまえてもいたので、周囲に少なからぬ影響を及ぼさずにはおかなかった。今それを公けにすることで、さらにより広い影響を、殊にかつての彼の話に毒されてしまった人々に与え得るのではないかと願うものである。

私は彼の性格を、私自身が理解した通りに提示しようと努めた。私はただ一つの光りの下、即ち平穩沈着な状況においてしか彼と面会していない。もともと、そのような折は彼自身の体力が消耗し、精神的にもかなり衰弱していたのだ。従つて、生気溢れる描写で彼の姿を紹介することは出来かねる。それは、彼の才がより活発に息づいていた往時を知っているという有利な立場にある者だけに可能なことのはずである。然しながら、彼の落ち着いた様子は健康の衰退から来る精神の衰弱を補つて余りあるもののように思われた。私は執筆に際し、能う限り入念に書くことと努め、かつ詳細に検討を加えることにした。私は真実だけを伝えていくはずだと確信してもいる。決して書き急いだりはしておらず、しばしば私自身の考察を挿入したこともあった。それは何も我が身に振りかかる非難を憂慮したからでなく、むしろ私の著述の唯一の意図を妨害するよう

なもの一つも見逃すべきでないといふ細心の注意を払ったことによるのである。唯一の意図、それは放縦で淫らな時代を改革することに向け、能う限り努めたいといふものなのだ。そして、この極立って優れた手本が我々の神聖な信仰を支える証しと手を携えたにも拘わらず、悔悛以前の彼と同様の生を辿る人々に何の影響をも及ぼさないとしたら、彼らは墮落した考えに身を委ねてしまっているのではないかと大いに懸念されてくるのである。

### ロチェスター伯の生涯

ロチェスター伯ジョン・ウイلمットは一六四八年四月(ツマ)に生まれた。父はロチェスター伯ヘンリーだったが、むしろウイلمット卿という称号で知られていた。この人は先の内戦で大きな役割を担い、歴史書でもしばしば言及されている。即ちウスターの戦以後、現国王陛下をお連れして各地を転々とし、無事フランスに逃れられるまでお命をお守りするという榮譽に最も与かったのである。だが陛下の英国御帰還を見ずして亡くなった彼は、名声と称号、及び極立つた勤めによつてもたらされた陛下の御寵愛を賜る権利以外は殆ど何も息子に遺さなかった。こうした僅かばかりのことを入念に取り計らったのが、慎重さと分別とを優れて備えていたジョンの母である。彼女は由緒正しい貴族ウイルトシャのセント・ジョン家の娘であり、それ故彼女の息子も身分相應の教育をあらゆる面に亘って受けることになった。

学校時代のロチェスターは書物を理解する並外れた能力を持つて

いた。しかも、後に大いなる輝きを伴って誇示されることになるあの才能も、当時既にその姿を現わしていたのだった。彼はラテン語を完璧に習得していたので、死に至るまでその繊細さと美しさを充分味わう力を保持していた。かのアウグストス時代の比類なき著作家達にも造詣が深く、彼らの作品を読む時、偉大な知性の持ち主だけが学問に見出し得るはずの喜びを彼も感じていたのである。

大学に入学した折、ちょうど全土に急速に広まりつつあった大いなる歓喜は彼に幾許かの悪影響を及ぼすことになった。国王陛下の御帰還に伴うこの熱狂は、かくも有難い祝福を与えられた神への心からの謝意にふさわしかるべき中庸と沈着によって規制されはしなかつたのである。彼もこうした狂燥をひどく好みだしたのだった。

彼の学寮長は優秀かつ敬虔な牧師ブランドフォード博士で、この人は後年オックスフォードとウスターの主教に昇任することになる。彼の監督下、ロチエスターは学殖溢れ、善良なるウォダム学寮特別研究員フィニアス・ペリー氏から直接指導を受けた。この師に対して彼は以後も敬意を込めて接し、偉大な人物に似つかわしい方法で報いたのだった。だが当時の風潮に翻弄され、彼は学問を放棄してしまう。如何なる手段をもってしても、彼を学問の途に引き戻すことは出来なかつた。ところがイタリア旅行に出掛けた時、学殖豊かで立派な教育係バルフォア博士（この人は今、故郷スコットランドで著名な医師となっている）は勉学への愛着を甦らせることになり、そうなる書物を読むよう仕向けたのだった。ロチエスターは死の直前の三日間、この教育係をどれほど愛し、尊敬しているかを私に繰り返し述べた。その指導における誠実さと配慮の故に、両親に次

いでこの世で最も多くを負っているときと言ったのである。しかし博士が多くの策略（と彼は表現したのだが）を用いて書物と読書の喜びに彼を引っ張り込もうとしたことほど、目立って影響力を持ったものはなかつた。それ故、爾後許された時間の大半を費やしてしまった例の不品行の合間を縫って、彼は読書に耽ったのである。

彼の選んだ勉学の主題は常に立派なものばかりとは限らなかつたので、そうした読書時間はかなり無頓着に使われていたのだが、すっかり定着していた知識欲は学問をしたいと願う衝動的な想いと相俟って彼の知力を大いに覚醒させることになった。のみならず、彼の心がより良き事柄を味わい得るほどに変化する時のために、彼のその用意をもさせたのだった。

十八才で大陸旅行から戻ると、ロチエスターはかつてなかつたほどの有利な立場で宮廷に登場した。彼は優雅で背も高く、幾分瘦せぎすではあったが均斉の取れた体付きをしていた。彼はまさに育ちが良く、生来の穏やかな物腰と、これもまた殆ど生来のものと言え、る礼儀正しさによって、彼の話し振りは楽しく慇懃な感じを与えていた。彼には不思議なほど活発な思考力と活気ある表現力とが備わっていた。彼の知性は他人を寄せ付けなほほど明敏かつ崇高なものだった。その話し方も明晰で力強く、文飾を用いる時、それは誠に生氣溢れ、凡人には全く及びもつかなかつた。彼は古今の才人に通暁しており、英国ばかりか現代のフランスやイタリアの場合についても博く識っていた。また、思弁的な事柄を書いたり話したりするのを好み、しかも非常に精緻な論理の糸を用いたので、彼の想像力の赴く主題を気に入らなく思う者でさえ、その主題の扱い方に魅

了されずにはいられなかったのである。フランスではボワロ、英国ではカウリーが彼の激賞していた文人だった。<sup>5)</sup>時には他人の思想が彼自身の言葉と混在することもあった。だがこの事態は他人の著作を読んで受けた印象に起因していたのであり、そうした印象が彼自身思想として定着した結果に他ならない。従って、隷属的な他人真似などでは決してなかった。彼ほど想像力を大胆に飛翔させていながら、堅実な判断に制御されている者は他に殆ど見られなかった。このような育ちの良さと教育とを踏まえた若者が宮廷で歓迎されたのは、少しも不思議なことではなかったと思われる。

宮廷に参内してほどなく、彼は故国のために命を賭す覚悟であることを証す最初の機会を捕えた。一六六五年の冬、彼は海軍に志願し、サンドウィッチ伯の指揮下でオランダ東インド船団を迎撃する任務に就いたのである。そしてオランダ船団がノルウェーのベルゲンに入港したのを攻撃する際、サー・トマス・ティディマンの操るリヴェンジ号に乗り組んでいたのだった。作戦遂行中、ロチェスターは能う限り大胆かつ毅然たる勇氣を示した。さる尊敬すべき人の語るところでは、同じ艦に乗っていたクリフォード卿も一度ならずその勇敢さを褒めちぎったという。厳しい季節、苛酷な航海そして多大な危険を経たにも拘わらず、彼は直後の機会にも何ら躊躇することなく前と同じ行為に走った。その年の夏、胸中を近親にさえ打ち明けないうまま、彼は再び海に赴いたのである。彼がサー・エドワード・スプラッグ率いる艦に乗り込んだのはその年最大の海戦が行なわれる前日のことで、当の戦闘に際しては、同艦にいた志願兵の殆どが命を落としたのだった。ミドルトン氏(サー・ヒュー・ミドル

トンの弟)は両腕を撃たれた。戦闘の最中、サー・エドワード・スプラッグは或る一人の艦長の行動が不満だったが、大きな危険を冒してまで自分の指令をその艦長に伝えようと自発的に申し出てくれる者を見付けるのは容易ではなかった。ところがその時、ロチェスターは自ら進んでその任務を志願したのであった。彼は小舟に乗り、弾丸をかくぐって指令を伝え、サー・エドワードの許に戻ってきた。一部始終を目撃していた者全ては大いにこれを賞讃した。彼はこの艦隊での戦い振りで勇氣を示すことによって、己の人生を始めの必要があると考えたのだ。そうすることこそ、紛れもなく不屈の勇敢さを試す最大の試金石に他ならなかった。

彼は大陸旅行以前に次第に深入りしていったあの不行跡を全く控えていたので、海戦からの帰還に際してはそれをこの上なく忌み嫌うまでになっていた。だが過度の放縦を好む仲間の手に再び陥ってしまうと、簡単にというわけではなかったが、何段階もの過程を経て、結局は元の状態に戻ってしまったのだった。想像力の持つ生来の熱が酒で焼き付けられると、彼は途轍もなく陽気になったので、彼のそうした気質に気晴らしの種を求める多くの人間が不節制の深みにますます彼を引き摺り込もうと目論み、遂には彼を完全に屈伏させてしまったのである。その結果、彼自身が語ったように、五年の間彼は終始泥酔状態にあったという。必ずしもものべつ傍目に付くほど酒の影響を受けていたわけではないが、血が燃えだぎっていたので、自身を制するだけの冷静さを保つのは難しかった。そのため、彼は口にするのも憚られるほど野卑なことを頻りに話し、行なわせたのだった。拳句の果てに、どんなことでも辛いと思わなかつ

たほどの強健さを誇っていた健康を害ね、殆ど取り返しのつかないまでに評判を落してしまふことにさえなつた。生来彼の氣質には、快樂に対する激しい好みと、そして無茶な浮かれ騒ぎを求める傾向という二つの信条めいたものがあつて、それが酒のせいであつて、彼を極端に走らせたのである。前者は強烈な官能的行為に彼を駆り立て、後者はしばしば生命に係わるほどの奇矯な冒険や戯れに向かわせたのだつた。一方は肉体における不埒な欲望であり、他方は精神におけるそれであつて、彼は極端でないものは決して慰みにならないと思つてゐた。血が冷めて平靜な折は寛大で善良な人物なのに、一旦熱を帯びると、凡そ冗談や気晴らしの種になりそうなものは何でも徹底して追い求めたのだつた。他人を計画的に傷つけたりするのに、宮廷における自分の力を利用したわけではなかつたと彼は言う。ところが、滑稽詩や風刺詩で存分に才知を發揮した彼には機知と悪意を混ぜ合わせ、そこに適切な言葉を使う特異な能力があつたので、人々は彼の書いたものを読んで楽しむたといふ誘惑に駆られたのである。彼ほど巧みに調合し表現する術を習得した者は殆ど皆無だつたこともあつて、彼の作品は容易に知れ渡ることとなつた。そこで、とにかく何か極端な代物が現われると、ちょうど似姿によつて赤子の父親が突き止められる場合同様、それは父親かつ作者として彼の戸口に突き付けられるまでにさえなつてゐた。

こうした日々の行状は絶えず楽しいわけではなく、真面目な休止期間や深刻な自己省察の機会もしばしば訪れたのだつた。だが、それは別に宗教の深遠な原理に基いてローチエスターの胸中に目覚めて

きたものではなかつた。むしろ自然が、とりわけ何か病に苦しんでゐる時の彼にもたらした死への恐怖に由来してゐたと言へる。この恐怖故に、他人が彼をその虜にしようとするのを恐れた悪しき原理を受け容れるには余りにおとなしくなつたのだつた。だからこそ、再び元氣を取り戻すとすぐに彼は信仰や宗教への氣遣いを精一杯かなぐり捨て、宗教的原理に対しても心を一層頑なに閉じてゐたのである。彼の放縱な氣質は俊敏な知性と相俟つて、淫らな行為といかがわしい浮かれ騒ぎとに時間を割いてゐる連中との会話を好むようになつてゐた。こうした次第で彼は知恵や研鑽をして精魂を傾け、自身のみならず他人の抱く悪しき生活原理を弁護し、強化しようとしたのだつた。

この後、自らの生き方に一層の確信を抱いてしまふような出来事が起こつた。一六六五年にまたしても彼が海へ赴いた時、たまたま同じ艦にモンタギュー氏ともう一人のさる貴人が乗り合わせていたのだが、この二人、殊に前者は二度と故国には生きて戻れないと信じていたらしかつた。モンタギュー氏は間違ひなくそうなると思つたのだが、後一人はそれほどでもなかつた。ローチエスターとこの人物は幾分宗教的儀式めいたことをして、次のような取り決めを結んだ。即ち彼らの内のいづれかが死んだら靈となつて現われ、仮に來世があるというなら、それについて知らせなければならぬといふのである。だが、モンタギュー氏はこれに加わろうとはしなかつた。ベルゲン港でオランダ船団を拿捕すべき日が到來すると、モンタギュー氏は死の近づいてくる予感を抱きながらも、勇猛果敢に終始最も危険な部署に留まり続けた。例の貴人もやはり大胆な勇氣を

示していたが、やがて作戦の終了が告げられようとしていた。すると彼は突然震え出し、殆ど立っていられない状態に陥ったのだ。そこでモンタギュー氏が支えてやろうと彼の側へ行き、抱きかかえた瞬間、大砲の弾が彼を即死させたのである。モンタギュー氏も腹部を抉られ、一時間もしないうちに息絶えてしまった。ロチェスターが私に語ったところでは、これら二人の心に生じた予感を知って、魂と肉体という別々の存在があるという印象を彼は受けたのだ。しかも魂には内在的な知恵ないし密かにもたらさせる知らせに基く、一種の予言能力があるらしいと思ひ始めたというのだ。だがこの貴人が死後現われなかったことこそ、生涯に亘って彼を宗教から遠ざける罫の如きものになってしまったのである。もつとも、この話を私にしてくれた時、彼は次の二点を認めずにはいられなかった。先ず、死後の世界における魂は自らの動きを自律的に決定するのでなく、至高の存在の定める法と限界に従うと考へるのが妥当だということ。そして次に、彼自身のように真理の根本原理を貶めた人間は罪の報いとして、こうした極度に厳しい目に遭うと考へるべきなのが正しいということである。

ロチェスターはさらに、死期が近いという不思議な予感を人間が抱いたもう一つの例を話してくれた。それは彼の義母ウォー夫人邸でのことで、ある礼拝堂付牧師が自分はしかじかの日に死ぬという夢を見たのだ。だが家族皆にそのようなことを信じてはならないと言われ、自分でも夢のことなど忘れかけてしまっていた。ところが、夢に見た日の前日に当たる夕食時に十三人が食卓に着いていたので、その中の誰かが死ぬという愚かな迷信に倣って、若い御婦

人方の一人が彼を指差し、「あなたがお亡くなりになるのです」と言った。彼も夢を思い出し、いささか動揺したものだから、ウォー夫人が迷信じみた真似はするなと叱責したほどだった。それでも彼は明日の夜明け前に自分は死ぬに違いないと思ひ込んでしまった。もつとも健康そのものなので、誰も大して気にも留めないでいた。

これは土曜のことで、彼は翌朝説教を行なう予定だった。私室に退いた彼は、蠟燭の明かりが見えたことから、夜更けまで起きて説教の草稿を用意していたらしい。ところが翌朝、寝台で亡くなっているのが見つかったのだ。こうした事情から、ロチェスターは魂が物質とは区別される実体だと信じるようになり、これについてはしばしば考へる時もあったという。だが、この問題に関して不動の確信を得たのは私と初めて面会する前、生命さえ危ぶまれるほどの重病に陥った折だった。精気は衰退し切って身動き一つ出来ず、後一時間も生きていられないと思へる有様だったらしい。とはいへ、理性と判断力は明晰で力強かったという。そこで、死というのが魂の消耗ないし消滅なのではなく、むしろ魂が物質から分離する現象に過ぎないのだと充分彼には納得出来たのだ。彼はこの大病の際、過去の生活を大いに悔いたのだったが、後に私に語ったところでは、その後悔は神に対して罪を犯したことを自覚したというのではなく、何か漠然とした暗い恐怖だったのである。しかも、こんなにも早く己の力を費やすような生き方をしてきたことや、我が身に汚名をそぐ真似をしてきたことを残念に思い、言い表わし得ないほど苦悩に苛まれてさえた。そうした時に友人達の勧めに応じて牧師を呼びにやるのには同意したものの、実は大して乗り気でもなかつ

たという。牧師に側で祈って欲しいと頼んだのも礼儀を重んじる育ちから出ただけのことであり、彼自身はその祈りに全く加わりとはしなかった。

至高の存在について、ローチェスターはそのようなものが在るといふ印象を常に抱いていた。そしてしばしば私に明言したのだが、神が存在しないと固く信じているような徹底した無神論者を彼は知らなかった。ところが、いざ自身の考えを説明する段になると、至高の存在とはただ茫漠とした力であって、我々が神の属性と見做している善や正義とは無縁なのだと言ったのだ。これが私に語ってくれた通りの、宗教にまつわる彼の見解である。道徳についてだが、率直に打ち明けてくれたところによると、彼は他人にはそれが結構なことだと言っていたが、そういう言い方しておくのが穏便だろうと考えたからに過ぎなかった。また、普段は衣服を身に付けてはいるものの、人の目を恐れる必要がなければ馬鹿騒ぎをする際には素裸になることさえあったという。道徳を口喧しく唱えることが人間生活に必要なと思う者もいるだろうが、そうした連中でさえ実は己の信用や仕事のために道徳家だという評判を求めているだけで、それ以上のことは全く気にも掛けないはずだと彼は言うのだった。この点について彼は多くの事例を挙げてくれた。ひどく憎しみ合っているのに、人前では仲が良いと公言したり誓ったりすること。良からぬことを企んでいながら、女性に誓いを立てたり祈ったりして言い寄ること。罪なき人に汚名をそそいだり、悪事に引つ張り込まないからといって、多分復讐のために偽りの噂を流したりして楽しむこと。人々を相争わせて面白がること。突き付けられた催促から

逃れるために、凡そ考えつく限りの空手形を出して債権者を不当にも欺いたりすること。ともかくこれらの生きざまを忌むかと思う余り、ローチェスターは自らに対してもしばしば非常に厳しい言い方をしたことがあって、それを今ここで繰り返すのはいささか不謹慎だと思われるほどだった。

長年に亘る彼の生活信条や行状は以上のものであり、本来備わっていたに違いない、正義と徳を指すべき傾向を殆ど消失させてしまったのである。彼はしばしば田舎へ出掛け、数ヶ月間学問に没頭したり、或いは機知を主に風刺詩に向けるべくほとぼらせたりしたのだ。この事実を弁明して彼が私に繰り返し述べたのは、風刺による方法に訴える以外、正常を保たせることも忠告を与えてやったりすることも出来ない人間が世の中にはいるのだということだった。これに対して私は次のように答えておいた。即ち、真面目な風刺詩は時として人を批判するのに適切な手段となり得る。だが憎しみからのみ風刺を行ない、真実と偽りとを混ぜて詩を飾り立てたり、復讐を遂げるためには何も容赦しないと人々になど己の口を弁解する余地はない。無実の人をしばしば苦しめるのだから、激しい悪意に満ちた代物は機知に富んだ形で表現されると、大いに優れた人物にさえ纏わり付き、その人を汚すことになる。だからこそ滑稽詩の悪意は訓告に含まれる慈悲とは相容れないものだ。このように私が述べた時、復讐心が燃え盛らないと生気溢れるものは書けはしないと彼は反論した。なぜならば、怒りを覚えなのまま冷徹な哲学的概念に則って風刺詩を書くのは、まさしく何の科もない人間の喉笛を至極冷静にかつ切るようなものだからという



のだ。さらに、滑稽詩における嘘にはしばしば装飾の役目があつて、これを利用しないことには詩の美しさを損ねてしまふとも語つたのである。

他方面での彼の学問と云えば、古今の喜劇的で機知に富んだ作品やローマ時代の著作、そして医学書を読むことだつた。医学書は健康を害してから一層彼に必要となり、かつこのお陰で奇妙な冒険をする資格が出来てしまうのだが、その件について少し述べておきたい。ある不幸な事件によつて謹慎を余儀なくされた折、彼は極く親しい友人でさえ気付かぬほど巧みにイタリア人の大道薬売りに紛れてタワー街に出没し、台を設えて何週間か治療を施したりしたが、中々の成功を取めたのである。後年、彼は歴史書を多く読むようになつた。そして人足や乞食に変装するのを好んだが、それは時として卑しい色恋沙汰に血道をあげるための手段にもなつた。さまざまな相手から目先の変化が得られることを好んだのである。また別の機会には、単なる気晴らしのために妙な格好をして出歩くこともあり、しかも極く自然に振舞つたので、内実を承知している者でさえ変装した姿から正体を突き止める手掛りを見出せなかつたほどらしい。

これまで私はこの著述における目的に應えるため、必要と思われ限り詳細にロチェスターの以前の生活と信条を述べてきた。徒らに読者を立腹させたりする理由を与えないよう、慎みは持つていたはずである。直接彼の口から聞いたこと以外は書かなかつたし、少なからず聞かされていた彼の生活のより細かい点にも言及しなかつた。彼の生きざまに関与した人々もいる以上、彼らのためだけを願つ

て、これからも無闇に刺激したり傷つけたりする恐れのあることは述べないでおく。私が望むのは彼らの改心であつて、不名誉ではないからだ。他人へのこうした配慮から、私は彼の語つてくれた多くの注目に値する有益な話を削除している。とはいへ、打ち明けられた事実を知り得たからには、誰を指しているのか読者に推測させる契機になりかねない事柄を已むを得ず述べてしまつたかと思ふ。善きにつけ悪しきにつけ、不都合な場合には名前を明記しなかつたにも拘わらずである。それでもなお、ロチェスターの不行跡に大いに係わつた人々が私の取つたこの穏やかな措置に少しは心を動かされ、己の生き方を省みてくれるよう願わずにはいられない。併せて、過去を真剣に振り返つたこの氣高い貴族が自分達のことをどう思つたのかということも、偏見や憤怒に捕われずに考えて欲しいものである。

さて、ここで私自身がいささか関与した事柄について述べておきたい。数ヶ月に亘る彼との胸襟を開いた長い対話の後で行なつた自身の考察に基いて、それを披露するつもりである。面識を得てほどなく、私と同じ職務の人間に従来接してきた以上に率直に私と応対しなければならぬと彼は述べたのだつた。彼は自らの生活信条を私に隠し立てせず、思うところを嘘偽りなく明らかにしてくれた。しかも敢えて論争したり才知をひけらかしたりするのではなく、ひたすら心に憑いているものをありのまま語ろうとしていた。同時に、従前の処生訓に義理立てして絶対に考えを変えないというのではなく、もし納得がいくのなら違つて見解を受け容れても構わないと明言したのである。彼は私の提示するものを公正に見据え、承服出来る

点と出来ない点をはつきり指摘したいとも述べていた。こうして自身の意向を率直に伝えてくれたので、私としても彼を信じないわけにもいかず、同時に彼の話し振りに魅了されてしまったのだ。そこで我々は自然宗教、啓示宗教及び道德のあらゆる分野に立ち入ることになった。これらの題目に関して私の述べたことの多くに彼は喜んで耳を傾け、大いに満足してくれたらしい。我々が二人だけになった時、最も自由な対話が行なわれたのだが、他の人達が居合わせたことも何度かあった。後になって多くの人の著したものを読んで知ったのだが、彼は私が話相手になったのを好ましく思っていたばかりか、語り合った主題をもかなり気に入ってくれていたという。また、私が述べたこと、殊に最後の病の折に向いて述べたことを不快には思わなかったと彼自身が口にしたのである。だからこそ、我々が種々論証を加えながら自由に話した内容の実質的部分を公けにするのも、あながち無益なことではないと思う。彼に幾許かの影響を与えたものは、恐らく他の人々にとっても多少は意義があるのではないだろうか。私は彼を大いに承服させ得ると思われる論法を用いながら彼の話についていき、それ以外の論議を押し付けたりはしなかった。そうした論議の持つ説得力を疑ったというのではなく、彼に最もふさわしい論理を行使する必要を感じていたからである。対話を始めた当時、彼の状態は思わしくなく、大病から徐々に回復しかけている様子だった。牛乳療法を行なっている最中で、急な発熱に襲われることも頻繁にあった。極く些細な原因からでも衰弱しかねず、そう長くはないと自分でも思っていたほどだった。だからロンドンから田舎へ戻ってきた時、二度と再びロンドンへは

行けそうもないと信じ込んでいたらしい。だがロンドンで暮らしていた頃は大層元気で、しばしば外出したこともあったりして、精神は快活そのものだったという。従って、理性を曇らせたり弱らせたりの消耗状態に置かれていたわけでもなく、不機嫌や気塞ぎに悩まされたり、憂鬱に支配されていたわけでもなかった。その頃と較べて対話を行なった折の彼の様子がどうだったか、前に二度しか顔を合わせたことのない私には判断出来かねた。他の人々は彼の才には何ら変化が認められないと言ってくれたが、この点だけは特に指摘しておきたい。憂鬱とか生気の欠如とかによって、彼が他からの影響を受け易くなってしまったと考えられては困るからだ。事実、私自身そうした事態を彼の内に見出したりは出来なかった。

我々の対話へ到る過程を明らかにした今、本題に入ることにしたい。二人が取り上げた三つの主要な問題は道德、自然宗教及び啓示宗教就中キリスト教だった。道德については、世の中を統べ、健康、生活、友情を維持するためにもその必要性を認めていると彼は言った。そして以前の行状を大いに恥じていたのだが、それは自らを獣同然に墮落させてしまい、肉体に苦痛と病をもたらしたり名前を汚してしまったりしたからであって、至高の存在や死後の世界を深く慮ったためではなかった。だが、とにかく彼は恥を感じて、人生の方向を変えようと固く決意していた。この目的を彼は哲学研究によって遂げようと思っており、悪徳の狂気と愚行について好ましくも堅固な考えを持っていた。もつとも、正直に告白してくれたのだが、過去の行状が神に対する科であるといった悔恨の情は全くなく、ただ自身と人類とに対する悔辱だったというのである。

この点に関して私は彼に、世の中を正すべきものとしては哲学に欠陥があることを示した。即ち哲学とは思弁の領域の事柄であつて、これに専心出来るのは能力と時間的余裕のある極く少数の人間だけなのである。ところが、人類を矯正すべき原理というのは誰の理解力にも明らかでなければならぬ。道徳の問題に係わる哲学には義務の概略を示す以外にこれといつて堅固な規範はなく、我々がより細かく具体的な務めを果たす時はむしろ、人間の考え出したことや国家の慣習に従うものだろう。必然的に哲学は本性や欲望、或いは情念を支配する権威を持ち合わせていないことになる。これについて、私は次の二点を例として挙げておいた。第一は、あらゆる情念と物事に対する煩いとを根絶すべきだというストア派の格言にまつゝることである。彼らの目標が達成されたら、人生のどんな偶然も定めし安楽に思われてくるだろうから、確かにこの格言は好ましい一面を備えているのかもしれない。だが私には到底達成不可能な話だと思われる。人間の本性とはどんなに逆らつたところで、常に自身に立ち返えるものなのだ。それなのに、この格言は自然な本性や友情といった絆を解き、勤勉さを内なる熱意もいまま鈍重に作用するだけのものに貶めてしまう。仮に誰かを苦惱から救い出せたとしても、友情から生じる人生の大きな喜びを奪つてしまふに違いないのだ。第二の点は快樂の抑制に関してで、これがどの程度まで行なわれるべきかということである。この件で、彼は道徳面ですら従つていてという二つの処生訓を話してくれた。それは、他人を傷ついたり自身の健康を害してはならないということ、そして上記に抵触しない限り、如何なる快樂も自然な欲望を充足させるものとして享

受すべきだということだった。この欲望が単に抑制されるべきもの、或いは極く狭い範囲に閉じ込められるべきものとして人間に与えられたと考えるのは理屈に合わないと思つていたのだ。その処生訓通り、彼は酒を浴び、女性を弄んだのだ。彼に答えて、欲望が自然だというのがそれを享受する論拠になるのなら、復讐に燃える者や食欲な者が欲望を殺人とか盗みの口実にしても構わないことになりかねないと私は言つた。この場合の欲望も、目的を遂げるために激しく鋭いものになつては行かぬからである。然しながら、こうした類の欲望は当然抑制されなければならぬ。快樂を求めることと殺人等では、他人に危害を及ぼすか否かで違いがあるのなら、例えばある人の妻が汚され、娘が墮落させられるのは、その人本人にとつては何に劣らぬ大変な災いと言ふべきだろう。その点で侵さないでいるのは不可能なのだ。欲望に起因する放縱を矯正するには、欲望そのものを律する以外にはあり得ない。だからこそ神の意図は、獣じみた肉欲を我々が理性で支配するところにあると考へるべきだろう。これは猛々しい獣が人間の知恵によつて飼ひ馴らされ、役立つものになるのと同じことではないか。人間に欲望が附与されたのは、理性でそれを統べ、抑制するのが狙ひだつたと認めても、それほど馬鹿げたことにならないはずだ。この目的を遂げるためにこそ、欲望に許された範囲よりも氣高く、より永続的な喜びが我々に与えられているのである。また情欲を掻き立てる対象を避けるといつた類の他の哲学的規範が全て守られていないとすれば、恐らく節操を欠いた肉欲ほど情念を強烈にしたり、理性を曇

らせ精神を墮落させたりするものはあり得ない。望みを遂げることのみを狙って行なわれる誓いとか祈りなど、種々の不道德な行為を頻繁に繰り返す破目に陥るのも、この肉欲を措いて他にはないだろう。こうした不品行を持続するのにかかる負担は、他の行動面においても人間を偽り多き存在にしてしまうのだ。以上私の述べてきたことについて、ローチェスターはその通りだと正直に言った。そこで私は、もし己に害を及ぼさざらうことを承知している件に関しては欲望を抑えるのが理に叶っているのなら、欲望に駆られた無節操な行為が悪しき結果をもたらしかねない場合、神は当然その欲望を事前に制するよう慮るはずだと主張した。他人から望むことを他人に行なうのが正しい規範であるのは否定し難い。だとしたら、自分の妻や娘の一件では家の不名誉に極度に敏感になる者が自ら他人の非難に耐え難いようなことを行なった時には、自分で自分の有罪宣告を下さなければいけなくなる。人類の平和と人生全般の充足が我々の行動を統べる主要な規範の一つなら、欲望を抑えつつ家庭で満足して暮らしている人間が果たして、禁じられた対象を求めて欲望を解き放っている人間よりも不幸なのかどうか、世人に判断させるべきだろう。この点が自と明らかである以上、問題は個別の場合における欲望の抑制、思想の自由、健康状態の健全さ、職務への専心、人生全般に亘る落ち着きといった事柄に移ってくる。即ち、ある一つのことが他よりも前になされるべきなのか否かという問題である。欲望の抑制が困難かということについては、とても断ち切れぬほど放縦な自由に耽っているのなら、確かにそれは決して容易な話ではないに違いない。だが不純な情欲の炎を燃え立たせるよう

な機会を避け、正しく職務に努めている者は、それに打ち克つのが最初思ったほどには不可能でも辛いことでもないのが分かるだろう。従ってこの問題に関する哲学と道德のありようは自と明らかなのだが、ただそれらの原理的な規範には本性や欲望を制するだけの力が備わっていないのだ。そこで私は、もし人間が己の内なる法に基いて決断しないのなら、道德なるものは決して強くはなり得ないとローチェスターに向かって指摘した。人間が自分を体裁とか国家の法とかだけで規定したところで、遊蕩も結構だが余り目立ち過ぎないようにといった類の警告に従うことしか教わらないし、決して内なる普通の廉潔さへは導いてもらえないからである。美德が非常に複雑な性格をしている以上、人間は充分にその修養を積まない限り、必要とあらば互いに加担し合う複数の悪徳に足を引っ張られてしまい、どのような教条をも決して遵守出来ないだろう。また精神が美德の指示に従い、これを喜ぶのでなければ、確実かつ満足な結果は得られないし、人間の本性がより高い原理の力で内的に再生し変化を遂げない限り、何の効果も発揮されはしない。そうした変貌を遂げる状況が実現する以前に、腐った本性が勢いを増し、哲学は衰退するばかりに違いないのだ。とりわけ哲学が、肉体の性向に深く根差しかつ育まれる欲望や情欲と争っている時はそう言えるだろう。ところが、以上述べてきた私の見解が狂信、ないしは偽善的口振りに聞こえるとローチェスターは言ったのである。彼には私の話が考えもつかず、全く理解出来ないものだったのだ。とはいえ、彼は哲学と理性の指示については納得していたし、それらと精神がより一層親交を結ぶなら、それらの教条に従うことも容易になるはずだと信

じていた。彼のこうした意見に対して私は、内なる助けを求めて神に向かわない限り、いくら哲学にまつわる思弁をしたところで彼自身の本性と生活を改革するのに何の役にも立ちはないと言った。かつて目の前に鮮かに現われたことの印象が彼の理性に刻み込まれていて、それが彼の考えを支配しているのは明白だった。だが、こうした印象は記憶から逃れ易いものであるがため、我々人間はしばしばそれから逸れてしまうような考え方をしたり、時には正反対の印象の方が強くなつて、初めのものを否定する論議をしてしまうことさえあるのだ。そのような場合には、かの詩人の名高い科白「私はより善きものを見、それを可となす。されどより悪しきものに従う<sup>(6)</sup>」というのが、結局は哲学の行き着く果てだと諒解してしまつたりすることになる。然しながら、そうした折に真摯な祈りを通して神に向かう人々はこの正反対の印象から解放されるばかりか、これに対抗すべき力を与えられた感じさえ抱くのである。その時こそ、以前彼らを圧迫していた束縛が断ち切られるのだ。

ロチェスターはこれを本性における熱狂の爲せる仕業に違いないと述べた。人間の気持ちをおろそかに方向へ強引に逸らすことで、見せかけの勝利が得られるに過ぎないというのである。ユークリッドの問題に向かつて、詩を書き写したりしても同じ効果があるはずだとまで、彼は言い放った。これに應えて私は次のように述べておいた。もし私の挙げた手段が単に気持ちを逸らすだけのものならば、彼の言い分にも説得力があるのかもしれない。だが欲望の充足を求める傾向を駆逐するだけでなく、その傾向とは全く逆の印象を生み出し、人間に新たな精神状態をもたらすのだとしたら、真の信仰に

よつて心に生じるこうした変化には単に気持ちを逸らすこと以上の何かがあるのを認めざるを得ないはずだ。さらに付け加えて、理性と経験は我々人間の確信を決定づける要因だと私は言った、即ち理性なき経験は空想の造り出す幻影に過ぎず、経験なき理性もさほど説得力ある作用を為さないのだが、両者が協調するならば、それを基に望む限りの充足を得られるに違いないのだ。人間の心の中で何らかの想いが大なり小なり力強く作用するよう、至高の存在が仕向けていると信じるのを誰が不合理だなどと言えるだろうか。こうした作用の持つ力は、大抵脳に刻まれた印象に従っているのだが、自然全体の枠組を指揮するかの存在こそ、己が意のままにその印象を一層深くし得るのである。同時に、神は望む者に援助を与える善き存在だと見做すのが道理というものだろう。それというのも、ある大いなる機会には神が途轍もない方法に訴えて人間の心を変へることもあるだろうが、理性という機能を授かっている以上、人間は能う限りそれを行使するのが正しいはずで、然るべくして神の助けを願うべきなのだから。人間にはそれが出来るはずなのだ。以上私の言ってきたことは全て理に叶っているに違いないし、少なくとも蓋然性のあることだろう。この時こそ、善き人々は真の信仰の如何で強まったり衰えたりする内なる力を心で現実知覚するのである。それはちやうど、滋養の有無で体力の増減が分かるのに擬えることも出来るよう。ちなみに善き人々というのは、祈りにおいて頻繁に神の許に赴くことによつて、以前自身を圧迫していた悪しき印象から逃れる自由と、そして美德や真の善及び沈着に対する内なる愛とを感じ、靈的清浄の全ての要素に喜びを見出す人々を指している。そして今

ここに挙げた状況は、祈りの際の真剣な態度によってその人々の内に育まれ、それが消え失せると必然的に衰微してしまうのである。

こうして道徳という題目に関して大いに語り合った後でさえ、ロチェスターは未だに全てが想像の産み出したことに過ぎないと考えていた。彼は何一つ理解出来ないと言ったのだが、上述の印象の持つ力に己の想像を委ねる人というのは、思考を支えかつ中心となるべきものを所有している故に非常に幸せだとも告白したのだった。ところが最後の病の折に面会すると、我々が祈りと内なる援助について交わした話を新たな角度から眺められるようになったと彼は言ってくれた。そこで、話題は神や宗教全般にまつわる考えへと移ることになったのだった。ロチェスターは至高の存在を信じていた。

世界が偶然によって創られたのではなく、むしろ自然の規則正しい推移はその創り主の永遠の力を明らかにしているのではないかと考えていたのである。彼はこうした想いを決して拭い切れないでいるとさえ言っていた。だが彼自身の考えを説明する段になると、神というのは茫漠たる力であって、その本性の必然に基いて万物を創り出したのだと思うと述べたのだった。神は人間を動揺させる愛や憎しみといった感情を持ち合わせていないはずだから、当然報いとか罰なども存在しないに違いないと彼は思い込んでいた。彼はまた、人間の抱く神というものの概念が極めて卑俗なので、我々は神についてあれこれ余り考えるべきではないとも思っていた。神を愛するなど傲岸不遜の限りで、空想好きな連中の熱狂に他ならないというのである。従って、例えば短い讃歌などといった、極く一般的な形で神を讃える以外に宗教的儀礼はないと信じていた。その他の宗教

的儀式は全て、自分達は神を怒らせたり宥めたりする秘儀に通じていると世間に信じ込ませるために、牧師が考え出したことに過ぎないとも見ていたのだ。要するに彼は人事に関して特別な神慮があることを認めず、また祈りは結局神をしつこい要求に敗ける弱い存在と見做すことになる以上、祈りそのものにも大した意義がないと確信していたのだった。死後の状況についてだが、死に際して魂は消滅しないと考えていたにも拘わらず、彼は報いや罰のことを大いに疑っていた。前者は我々人間の些細な奉仕で獲得するには余りにも崇高で、後者は罪によって科せられるには極端過ぎるということなのだ。以上が、神と宗教にまつわるロチェスターの思弁の実質となっていた。

私は、神に関する彼自身の考えが余りにも卑俗なので、至高の存在が自然に他ならないなどと思うのだろうと言った。仮にその存在には自由も自らの行動を選択する能力もなく、叡知と善に基いて作用することもないとすると、これは神の存在を認めた彼自身の言う理由そのものと矛盾してくるからである。宇宙の秩序を根拠に彼が神を確信するのなら、同時に神が賢明で善く、力強い存在だと考えるべきだろう。これらの属性は天地創造において、全て等しく発現されたものに他ならない。しかも、神の叡知と善には自ら作用する手段が備わっているにしても、それは人間の尺度を遥かに超越しているはずだ。神が賢く善ならば、当然完璧さの度合において自身と類似している者を愛し、敵対する者を憎むに違いない。凡そあらゆる理性的存在は自然に己を愛し、己と似たものを喜ぶが、そうでないものからは顔を背けるのである。真理とは理性的な本性が全てに

亘って自身に準拠して行爲することであり、善とは他者の幸福を増大させようとする意向のことだろう。それ故真理と善はあらゆる理性的存在にとって理想の極地であり、神において最も顕著なものなのだ。神の慈悲も愛も神自身の内に激情や混乱を引き起こしたりはしない。そうした事態は我々自身にある弱さなのだと思われるし、為したいことを為す能力や技量の欠如から生じる現象に違いない。また、神は善き人々の努力に対し、彼らの本性にふさわしい援助の手を差し伸べると信じるのも道理に合うことだ。さらに、神に倣う人々にはとりわけて恩寵が与えられるべきだとも思われるのだが、それはこの地上では見られない以上、死後において実現すると考えるのが理に叶つていよう。来世での報いはより完璧に神に従う許しを得ることに他ならず、至福をも伴うものだろう。これに対し、罰というのには神から徹底した排斥を受けることで、凡そあらゆる恐怖と暗黒が付き纏うに違いない。以上のことは神の正義、そして報いや罰の及ぼされるところであると同時に、個々の人間の生き方に由来する当然の結果でもあると思われる。ロチエスター自身も信じているように、魂が肉体とは別の固有な実質を持っている以上、肉体の滅びた時、魂はそれまで宿っていたところを完全に忘れ去る状態を迎えるなどと考える根拠があるはずもない。むしろ己の爲した善と悪とを省みて、歡喜或いは恐怖を覚えるのである。そして、肉体を離れた魂はそれに伴う善き性向または悪しき性向次第で、より高い次元の完成へと昇つたり、より悲惨で寄る辺なき境遇に沈んでいったりすることになる。現世にあつては多様極まる諸事のために我々の心は冷え切り、本道から逸れてしまいがちなので、善き人々

にはしばしば大きな誘惑の手が伸び、悪しき人々には紛糾の最中にも安逸がもたらされたりするものだ。だが魂が感覺的事物を離れてより俊敏かつ崇高な形で活動している時、これは善き人々の歡喜と向上を導き、邪悪なる人々の恐怖と憤りを強めるだろう。従つて、賢く、善くそして偉大な至高の存在を信じていると公言しておきながら、本心では善き人と悪しき人の識別など為されまいと考えたりするのは虚しいことだと思われる。誰にとつても明らかな通り、こうした識別はこの世では充分に遂行されないだけの話でしかないのだ。

この世を統べることについてだが、もし至高の力が世界を創つたことを信じるなら、それがこの世界を支配していないと考える理由はなくなくなつてしまふ。我々がそうした事態を否定すべく考え付くのはせいぜい、気の散る余り神は支配し切れないはずだといった程度のこと位だろう。第一原因たる神が全てを査閲するのならば、第二原因が無限に近いほど多様な上に、それらの関与するところまで一切を至高の力が配慮する必要も生じてきて、どうしても気が散らざるを得ないとも言ふべきだろうか。だが人間にあつても、能力に乏しい者は一つのことにはか没頭出来ない反面、より大きな力に恵まれた者は決して気を散らすことなしに多くの事柄に注意を払い得るのである。それはちょうど目が一見しただけで、多様な対象を何の混乱もなく狭い範囲内に捕えらるようなものだろう。もし神の知が人間のそれを遙かに超え、全宇宙を創造し形造る能力も人間の限られた活動を超えていると考えるなら、この世を統べることが神の気を散らす種になるなどとは思わなはずだ。そして一旦この偏

見を克服すれば、我々は全ての事物を導いている神の摂理をすぐにも認められるに違いない。これこそ、まさしく偉大な創り主たるにふさわしい配慮というものだろう。

神を崇拜することについてだが、仮にも崇拜が神の幸福に寄与するだとか、弱き者が己への賞め言葉を耳にして抱く愚かな喜びの如きものを神にもたらずだと思ったり、或いは単なるしつこい要求を繰り返すことで神を意のままに出来るなどと信じ込むのは、神に対する誠にけしからぬ考えなのである。崇拜の真の目的は次に列挙する通り、これとは別の次元で考察すべきなのだ。即ち、人は新たな原理の支配を受けない限り、完全に改心したことにはならない。その原理を強固にするには深く、頻繁に神を冥想すること以外に手段はない。神の本性は我々の理解を遥かに超えているが、その叡知と善の完璧さは我々の想像力の及ぶところである。しばしば神を想い、神が世界を統べ、己の行為を全て注視していると考える人は、より生気に溢れ頻度も増すはずの冥想から著しい効果を感じ取れるだろう。従って私的であれ公けの場であれ、神への想いをより深く根付かせると同時にこれが我々に一層深く影響を及ぼし得るよう努めることこそ、宗教的崇拜の真の目的に他ならない。この冥想を頻繁に繰り返すことも是非必要になってくる。余りにも長く間隔を空けたりすれば、冥想のもたらす印象は次第に弱まり、他のさまざまな雑念が入り込むかもしれないのだ。また、単なるしつこい要求で恩寵を獲得するのが祈りのもたらす利益というものなどと考えるべきではない。恩寵とは、我々の祈りに応えるべく結んだ約束に基き、神が心の準備の立派に出来ている者に与えてくれる報賞なのだ。

祈りによって我々の敬虔な気質は育まれ、活動する。これこそがあらゆる霊的清浄と美德の根幹なのである。

確かに、我々には神の本質について適切な考えを抱くことが出来ない。一体、我々は如何なるものの本質に対しても正しい理解を得られないのだ。我々は普通、あらゆるものに対して外見或いはその及ぼす効果に考察を加えた上で、その本質について推理を働かせている。それ故心の中に神の全き心象など形造れはしないのだが、神が自らを明らかに示したところを基に、神の概念を構築することだけは出来るのである。と同時に、大いなる畏敬の念で打たれた我々の心には、完璧なものを愛し、模倣したいと願う気持ちが生まれてこなければならぬ。なぜならば、神を愛すると言う時、その意味は、神聖で正しく、善であり賢明であって無限に完璧な存在を愛することなのだ。かの存在における屬性を愛することは、我々自身の内にそれらを所有したいという願いをもたらずに違いない。他者の内に愛すべきものを見出した時、それが何であれ、我々は愛の度合いに応じてそれに倣いたいと自然に願うのである。神を愛し崇拜するというのは、神の人間に対する善を巡って我々が抱く心情の正しく理に叶った現われであり、当然の反礼と言うべきものでもあらう。ただ、崇拜は神への貢ぎ物として強要されているのではなく、我々自身の内に神の本性に従う状態を生み出すべき手段として求められているのだ。これこそが純粹で汚れなき宗教の主要な目的なのである。

時として宗教の目的を墮落させ、人を欺く術を思い付く者がいたとしても、それは我々が従事しているあらゆる職務の場においても



起こる類のことに過ぎない。偽医者は医術を腐敗させるし、つまらぬ悪徳弁護士は財産問題を紛糾させたりで、とかくどんな職務も、そこで行なわれる数々の不埒な仕業で台無しにされてしまうことがあるはずだ。

こうした話全般にロチェスターは必ずしも満足していたのではない。人間の心に深く刻まれた神の印象が世の中を矯正する強力な手段だろうことは確信していたようだし、神の摂理を断固否定していたのでもなかつたらしい。だが死後の世界については、魂が生まれ変わると見做していた。魂が肉体に宿っていた時に行なつたことは脳で相応の形として作られかつ留められておくのだが、それは魂が肉体を離れた瞬間、全て消滅するというのである。そして魂はこの世とはどこかしら違つた状態に入り、新たな道を歩み始めるとも思っていたのだ。だが私は、彼の考えがせいぜい空想から生まれただけの根も葉もない推測に過ぎないと言わざるを得なかつた。また、たとえ記憶の多くが脳に宿るのは否定出来ないにしても、過去の事柄に関して魂の抱く記憶は必ずしも全て、物理的な形として脳に存在しているわけではないとも述べておいた。物理的な形に依存しない非物理的な事柄に対する抽象概念や観念をも、我々人間は持ち得るからである。虚偽や意地の悪さといった罪は心に宿り、肉欲や食欲は肉体に宿るものだろう。そして肉体全体が魂の器であり、目と耳が視覚と聴覚の器官であるように、脳は記憶の宿に他ならない。だが記憶の力と機能は視覚と聴覚の場合同様、心に存在するのである。それ故、魂が自らの力もしくは死後あてがわれる何らかの繊細な器官によつて、考えたり記憶したりするだろうというの

も全く想像出来ないことではない。ただ、実際のところ我々が魂の本性を殆ど知らない以上、推測に基いて仮説を持ち出したり、それでは説明出来ない厄介な点のあることを理由に、その仮説を退けたりするのには愚かな行為と言ふべきだろう。我々は死後如何にして記憶するのか知らないのと同様、今如何にして記憶しているのかという実際すら殆ど理解出来ない。唯一確実なのは、現に今記憶という行為が出来ていること、そして死後も同様だろうということだけなのだ。

死を間近にした時に善き人の感じる密かな喜びと悪しき人の覚える恐怖とを私がとりわけ強くロチェスターに訴えると、彼はそうした事態など教育から受けた印象に起因しているだけに過ぎないと考えようとした。だが彼がしばしば告白したところでは、宗教の責務というものが真実であろうとなかろうと、宗教に確信を抱き、良心において平静を得るように生き、神がこの世を統べることを信じ、神の摂理に黙従し、死後の永遠の至福を期待する人はこの世で最も幸福な人なのだと考えているという。このような確信が得られ、そこから必然的にもたらされる助けと喜びをも持てるものなら、自分の所有する全てを与えても構わないとさえ彼は言つたのだ。私は彼に、人間の信条が墮落する根源は悪しき生活だと指摘しておいた。これこそが精神を曇らせ、より善き事柄を識別する能力を奪つてしまうのだ。だからこそ悪しき生活を送る人間は、下手をすれば己の内に招来しかねない混沌から逃れて安逸を得られるように、都合の良い見解を探し出さずにはいられなくなるのである。ロチェスターは、ある行為をした後で、内部において自身に向けられた激し

く厳しい挑戦を感じたことがあったのを否定しなかった。だが彼がそれを感じたのは己に著しい影響を及ぼすようなことをした後であつて、多分私が遙かに大それた罪と呼びたいほどのことをした後ではなかつた。これは彼が身を委ねた不品行に由来するもので、その結果彼の判断力が墮落し、識別能力も損われたのだと私は言つた。しかも長い間頻りに不道德な行為に耽つてばかりいたので、それが全く親しいものとなつた挙句、恰も自然なことのよう思われるほどになつてしまつたのだらう。従つて、彼が善悪に対する厳密な感覺を持ち合せていけないのは何ら不思議なことでもない。それは熱のある者が味を判別出来ないのと同じような現象なのだから。

ロチェスターは宗教の全体系が、それを信じたら話だが、平穩をもたらず基盤としては何よりも遙かに優れていることを認めた。その時の彼の心中における平穩というのは、神の如く善き存在が自分を悲惨な目に遭わせるなどは考えられないということだつた。私は彼に尋ねて、悪しき生活の果てにそれほど多くの病を抱え込んでしまつた時、神を恨むのか、それとも奇跡によつて救つてもらへると思ふのかと言つた。彼はそのようなことをする謂れはないと答えた。次に、もし罪の自然な作用で心が恐怖と苦悶に陥つたなら、これは死に屈しない存在に巢喰うものである以上、奇跡的な力が干渉しなければ永続するに違いないのだが、そうなるのも自ら選んだ悪しき生の結果であるのに、責任転嫁をして神を責めたり出来るのかと私は聞いた。

神を信じられる者は幸せだ、誰にでも出来ることではないのだからと彼は答えた。

そこで、我々は啓示宗教について長い間語り合ふことになつた。彼には靈感という業が理解出来なかつた。聖書の筆記者達が熱意と誠意を持ち、そして書いたとは信じていたが、神がどうして自身の秘密を人類に明らかにするのか分らないといふのである。なぜ人間は宗教によりふさわしく、より啓発されたものとして創られなかつたのか、どうして人間の本性は腐敗しているのか、或いはアダム以来墮落してしまつたのか彼には納得がいかなかつた。彼の見解では、神が自らの心を一人の人物に伝えたのは、その人に世間を欺く力を託したといふことなのだ。予言だとか奇跡だとか、この世はいつも奇妙な話に満ちている。大胆で策略に長ける者が素朴で信じ易い民衆に向き合えば、話を簡単に信じ込ませ、何一つ反論も受けずに流布させたり出来るからだ。聖書における文体の不統一や状況の奇妙な推移、殊に時間的順序に現われた矛盾、カナン人を滅ぼす際に神がイスラエル人に命じた残虐行為、割礼及びその他多くのユダヤ教の儀式など、こうしたものは神の本性にそぐわないと彼には思われていた。しかも『創世記』の初めの三章は譬話でない限り、決して真実を述べてはいないと言ふのである。以上が啓示宗教全般と殊に旧約に対するロチェスターの異議申し立ての実質だつた。

これら全てに対して私は次のように答えておいた。即ち、宗教以外の場合、主として状況証拠が確認されていて真偽を疑ふ余地のないことが提供する事実に基づいて、もう一つのことを信じるのは理に叶つているし、この世の統治や正義が依拠する要点ですらある。従つて、ことの真实性、潔白で公正な証言、そして恐らく公けの場で為されるはずの確認行為が協調して我々に事実関係を納得させる時、

多くの人間が一致して嘘をつく事態はあり得るし、現に今もそのようなだろうなどと言ひ張るのは徒らなことに違ひない。宗教以外のあらゆる局面で、一方の真实性が高く、他方にはそれと釣り合ふべきものが見られない時、人は同意を与えるのだ。それと同様のこと、例えば救い主が埋葬された四日後にラザロを墓から呼び出されたとか、<sup>(9)</sup>救い主自身が死後甦られたとかいった場合などを挙げてみたい。多くの人々がこうした奇跡の証言において一致している時に、世の中にひどい詐欺行為はそう多くはないが、これらは間違ひなくそうした類のことだなどともっともらしく訴える者がいるだろうか。当時のユダヤやローマの著作家からできえ、救い主が十字架に昇られたこと、全ての弟子や信徒がその再臨を確信していたことを我々は事実として知り得るのである。彼らがこれを信じたのは、使徒の、そしてまたそれを目撃し、追認したために命を落とすことになつた何百もの人々の証言に基いていたからだ。そうした人々は非難と迫害だけしか受けないのを承知しながら、熱意を抱きつつ各地を回つて世間を納得させ、多くの驚異を為すことで自らの証言の正しさを訴えたのだ。今、これが単なる作り事かもしれないと言つて全てを退けたり、蓋然性の高いことなので現実には彼らの語つた通りだつたらうという推定すら下さずにおいたりするのは、明快な国語を用いるなら、「証拠が何であれ、我々は断固それを信じない」と言うべきだろう。

人が信仰を持ってないと言ふ時、一体どんな手立てがあるのかとロチェスターは詰問してきた。人は己の信仰を左右出来る存在でもなく、信じるというのもせいぜいで如何にももつともらしい見解に過

ぎないのだからというのである。これに對してだが、信仰の問題を巡る理不尽な考えに心が捕われるばかりで、他方にあるはずの宗教を擁護すべき証拠を熟考することなく、ほんの一瞥をくれただけでこれを拒絶する者は信じられないのでなく信じようとしないので私は答えた。しかも悪しき生活を送る限り、問題を正しく検証するにふさわしい資格は得られないのだ。人間は平静かつ廉潔になり、然るべく心を傾注させて問題を公正に検証しなければならぬ。その上で、良心に従つて発言をすれば良いのだ。万一、最低の状態にある良心の言うところに耳を傾けたりすると、一方を弁護する論議が他方を支持するそれより遙かに劣つてしまふのである。私にも判つたのだが、悪漢と愚か者のいるお陰で途方もないことが実に易々と信じられてしまふのだという漠然とした想いにロチェスターは憑かれていた。だからこそ彼は、キリスト教の真理を支える歴史的な証しを殆ど考察せずに結論を導き出してしまつたのだ。むしろ検証するどころか、自身の知力と研鑽を傾けて正反対を支持する側に回つたのである。彼の立場から見れば、信じるということはせいぜい一つの見解に過ぎないと言ふべきだろうし、証しが単に蓋然性を持つだけのことならば、確かにその通りと認めるべきなのだろう。然しながら、その証しに疑問の余地が全くないのなら、それは知識の如く確固たるものになつていくに違ひない。例えば我々は、オットマン帝国の首都たるコンスタンティノープルという大都市があるのを、ロンドンという大都會を知っているのに劣らないほど確信している。また、現に君臨されているチャールズ国王陛下と同様、かつてエリザベス女王が君臨されていたことを少しも疑うものでは

ない。このように、信じることは見ることや知ることと同じく確実なものであり、決して疑問を投げ掛けられるべきではないのである。神を巡る事柄を信じるということには二つの種類がある。一つは啓示宗教の確証を得るために、事実関係にまつわる全ての証拠を聖書における預言と比較することである。聖書では種々の事柄がその実現に先立つ何世代も前に正確に預言されており、しかも託宣のようにどうとでも解釈される曖昧で疑わしいものと違って、率直な言葉遣いで伝えられている。その一例として、クロスなる名前の者が七〇年と定められた期限の後、ユダヤ人を幽囚から故国へ送還することを告げた預言がある。<sup>100</sup>或いはシリアやエジプトの諸王の歴史をダニエルが厳密に預言したり、エルサレムの破滅をさまざまな付帯状況と共に我々の救い主が預言したりしている。<sup>101</sup>こうした点を道徳に関する聖書の優れた規範や意図と突き合わせる時、少なくとも世の中の他の事柄同様に、これを信じるのは理に叶うことだろう。とはいえ、こうした信じ方というのは極く一般的な確信を心に抱いているだけあって、人間が聖書に記されている指示に心を傾け、従うことにより、ある力が自らの内に流れ込むのを感じるまでは十分な効果を発揮しないのである（聖書の指示が理に叶っているのは、次のような証拠から否定出来ない。即ちそれは優れた医師の処方に従い、そこに記された規定が正しく容易な時には、健康を取り戻すためにもそれに身を委ねるのが理に叶っているのと同じなのだ）。そして、ある力というのは己の欲望と情欲に隷属している状態から人間を解放し、人生の偶然を超えるほど彼の心を高め、内なる純潔を広げてくれるだろう。その時こそ、彼の内には清澄で落ち着いた喜び

が生まれくるのだ。これらの手段が自身に及ぼす効果によるだけでなく、繰り返し祈ったり他にも努力をしたりすることによって、善き人々は上記の次第が真実であると確信するようになり、聖書に記された約束に應えられるようにもなっていくだろう。ところが、この一部始終をローチエスターは単なる空想ではないかと言ったのだ。私はこれに答えて、以下の通りに述べておいた。即ち、間違っていない目覚めた状態で外出している人に向かって、多分夢を見ているのではないかとか、床に就いているのに外出していると思込んでいるだけではないかとか、或いは眠っているながら外を歩く人がいるのと同じことで、実はまだ眠っているのかもしれないなど言うのは理不尽極まるだろう。同様に、妙な空想をしたことが原因で罵られる他人の話はいざ知らず、宗教心篤い善き人々は自身がまやかしなどに支配されていないのを弁えているし、熱を帯びているのも狂信状態にあるのでもなく、静謐で清らかな原理に支えられているのだということが分かってもいる。だがローチエスターはこれも全然納得出来ないと言い、彼の理解出来ない事柄を私が意図的に論点回避しているのではないかとさえ訴えたのだ。

啓示の可能性についてだが、それを否定するのは虚しいことだ。即ち神は我々に目で物を見る視覚を授けたばかりか、ある人間には他人が全く及びもつかないほど崇高なものを理解する能力を与えているからである。同様に、他人には不可能な方法を用いて見たり知ったりする能力を、神がある人間の心に目覚めさせたりすることはなと言っているのはまるで根拠の薄い主張に過ぎない。盲目の人が自分に与えられていないが、世の中には視覚という人間を支配するもの

があるというのを納得していながら、なおかつ信じ難いと思つてゐる場合とは違つて、この能力については誰もが信じられるのではなからうか。ある人々の手に世間を欺く能力が与えられたという点に關してだが、彼らの廉潔な氣質に加え、神がある事柄については一個の人間を強力に拘束している以上、神から託された通りの権限を行使する以外に、その人は何も民衆に訴へることが出来ないはずだ。さらに、人々が奇跡を確認するというのは、彼らが世間に伝える事柄に關して、彼ら自身を保証する神の信任状に相当するものだろう。これは正直な人間でなければ決して行なおうとしないことを全能なる神に宣誓させるに等しいのだから、欺瞞に加担する行為だなどは考えられないのだ。人類の墮落及び我々自身恐らく充分に説明のつかない諸問題についてだが、神の熟慮の秘密を測り知れない我々は、善にして神聖なる規範の優れた体系に含まれる難解な部分に満足がいけないという理由から、この体系を理不尽にも拒絶してゐるのである。人間の本性には容易に矯正し難い大きな混乱状態があることを、共通の経験から我々は知つてゐる。あらゆる哲学者がそれに氣付いてゐるし、理性で己を律しようと考える人も全て、理性と本性との闘いを感じてゐるのだ。それ故、魂の氣高い力が墮落する場合もあるのは明白な事実だと言へるだろう。

だが本性における混乱が明快な規範で矯正されないまま、その一方でなぜ人間が策略を用いてまで、自分は神の御名のものに語つてゐるのだということを世間に納得させなければならぬのかとロチェスターは言つた。私は答えて、人類の魅りと救済を目指す宗教はあらゆる人々を覚醒させ、皆に働き掛けるためにも開かれたもの

でなければならぬし、概して素朴な人間こそが神の恩寵を受けるに最もふさわしいのだと述べた。こうした理由があればこそ、天からの使者は世間を目覚めさせるほどの驚くべき証しを伴つて現れたり、自らの伝える教義に耳を傾けるべく人々に心の準備をさせるのに、意表を突く徴を用いたりする必要があるので。精妙な思弁の問題に過ぎない哲学には信奉者が殆どいない。哲学自体にもその指示するところを信じるよう世間を束縛する権威は存在しないので、観念的な事柄に心を傾けて喜びを求め、高貴で洗練された性格の人だけにしか受け容れられていない。だが真の宗教はより重いものを支えるべき、一つの基盤の上に築かれなければならないのだ。しかも既に心の用意が出来ている人々に及ぶだけでなく、大いに目立った刺激がなければ悪しき生の内に眠つたままに違ひない連中をも目覚めさせるほどの説得力を持ち合わせていべきなのである。

この時そして他にも適当な折に、私はロチェスターが知力を悪用していることや、非常に深刻な事柄を少しばかり想像力を働かせるだけで汚してしまつてゐることを知つてゐると指摘した。しかも、奇跡の業を策略のひけらかしなどと呼ぶ類の放縱な表現に見出す樂しみのせいで、本来なら慎重に接すべき奇跡を全く検証しようとも思つてゐないのだとさえ私は言つた。

旧約については、時間の隔たりが余りにも大きいので我々にはそれが記されている言語の知識が殆どないし、当時の歴史に關しても不完全な説明しか得られてはいない。ましてその頃の習俗、言語形式或いは時間の幅を計る際の単位など何も知らないのだ。だとすれば、旧約の多くの箇所が我々には難解だということより、理解出来

る部分がそんなにも多くあるという方が驚異と云うべきではなからうか。我々キリスト教徒にとつての旧約の効用とは、ユダヤ人の寺院の破壊される以前にメシヤの到来が既に約束されていたのが、彼ら自身靈感を受けて書いたと認めている著作から明らかにされていることだろう。遙か昔になされたこうした預言は他の誰でもない我々の救い主キリストにのみ当て嵌まるもので、この事実こそが福音書を支持すべき確固とした証しとなつていたのである。旧約の主要な部分の書かれた時から三千年余り後に生きてゐる我々としても、その中の多くのことを理解出来ないにも拘わらず、この預言が途轍もないものなどとは思えないのだ。

イルラエル人によるカナン人滅亡についてだが、仮に神が何の科もない彼らの間に疫病をもたらしたとしても、それは非難されるべきではないということを考え合わせる必要がある。神にはそうした手段で彼らの命を奪う権利があつて、しかもそれが不法でも残虐でもないとしたら、直接的な方法で権利を遂行する場合同様、他の人間に命じて行なわせる権利も所有していることになるのだ。さらに、疫病や飢餓で苦しめるのと較べたら、剣で命を奪うのは遙かに穏やかな方法だろう。その上、父親の罪からは免れてゐる子供に対しては、神が来世において償いを与えるに違いない。それ故理解し難いのは、なぜイスラエル人がそのような残虐行為を実行するよう命じられたのかということだけになる。だがこの行為が将来に対して先例とはならないよう定められていたのを考えるなら、それほど厄介な問題でもなくなるだろう。なぜなら彼らは天から格別の保証と委任を受けて行なつたのであり、そのことが大いなる奇跡によつ

て全世界に向けて証されたからに他ならない。その奇跡こそが、彼らが神の正義を果たすべく特に選ばれた者であることを明らかにしたのだ。その上、彼らをかくも過酷な奉仕に就かせることで、神は彼らに途轍もない手段で罰せられる破目になる偶像崇拜への恐怖の念を植え付けようとしていたのである。

イルラエル人の宗教的儀式については、それにまつわる偶像崇拜を完全に理解している点を除けば、我々は誤つた判断を下しかねない。我々も知つてゐる通り、彼らは確かに偶像崇拜を掲げる傾向が強かつた。そこで、彼らがそれを極度に嫌悪するようになるためにも、他の儀式を行なうことを強いられたのだ。それでもなお、元来宗教的崇拜において目を見張るほどの壮麗さを好むこの人々には、多くの虚飾に満ちた儀式や犠牲に耽ける赦しが与えられていた。これら全てに亘つて、詮索好きな人間が望むような、いちいち詳細で満足のいく答えを得られないとしても当然だろう。長い時間的隔たりと他の偶然が相俟つて、それらの意義を明らかにする光を当ててくれるはずのものを消滅させてしまつたからだ。また天地創造については、どの程度までそれが比喩的なことなのか、或いは歴史的なことなのかといった議論も大いに交わされてきている。だが天地創造にまつわる話には、歴史的に見て真実でないものは何一つないと思われる。と言つても、歴史におけるどのような事柄にも劣らず優れた根拠のあることなのだが、霊とは空中に声を発し得るものだというのが真実であると認められるなら、遙か後で創られたエヴァがかの邪悪な霊の発した声を聞いて欺かれ、蛇が話し掛けてきたと思ひ込んだとしても何ら不思議はないからだ。

これら全てに関し、ロチェスターが聖書の曖昧な箇所に基づいて宗教を検証している限り、彼は進むべき方向を間違えているのだと私は述べた。それ故彼にキリスト教全体の構造と、それが提示し規定するところの規範や手段を考えて欲しいと望んだのだ。その規範に則ることほど、世の中の平和や秩序そして幸福をもたらすと同時に個々の人間にも資するものは他にない。穩健、節制、中庸といった規範は人生の、そして恐らくは他でもない健康の最善の守護者なのである。世俗の虚飾に対する軽蔑や謙讓、さらに職務に善く努めることは、人類の多数に付き纏う愚行と誘惑から心を解放し、自由へと高めてくれるのだ。貧しき者の窮乏を補い、受けた害を許すことほど高潔で偉大なことはない。まさに正しく慈悲深く、親切で仁愛に富み、情け深いことほど人の名声を保ったり高めたりするものはない。情欲や不品行とは無縁の穩やかな氣質や清澄な心ほど、魂にある能力を解き放つものはない。「己の欲するところを他人に施し、己を愛す如く隣人を愛すべし」という福音書の規範が実行される時ほど社会、家庭及び近隣を幸福にすることは他にあり得ない。キリスト教の信仰自体も飾らず素朴なものであり、高潔極まりない教義に誠にふさわしいと言える。この信仰にまつわる儀式もやはり、水で淨めることで入信が許されるとか、パンと葡萄酒で救いの死を想うとかいった類の極く少数の意義深いものだけしかない。しかも人々を説いて高潔さへ向かわせるべき、強い力を持った動機がそれらの中にあるのだ。神が我々を注視し、全ての行動に関して我々を裁くはずだということ、及び我々が永遠に幸福になれるのかそれとも悲惨な目に遭うのかはこの世の生き方次第だということ

ある。救い主の生涯という模範、かつ彼が死において我々への大いなる愛を示されたことは、彼に従い、彼を真似るよう我々に強い債務事項の如きものだろう。救い主と使徒達の用いた平易な話し方は、そうした素朴な表現ばかりのところには策略など入り込めないことを示している。牧師だけが知っている秘密など一切なく、全てのキリスト者に全てのことが明らかにされているのだ。靈的清淨の報いも全てが来世にまで引き延ばされているわけでなく、善き人々は特に祝福され、良心において平和を、神の愛と永遠に神を見ることに対する確信とにおいて大いなる喜びを得るのである。しかも一生を通じて極立った祝福が彼ら善き人々にしばしば伴うことさえあるし、或いは逆に、時として厄災が彼らを襲ったとしても、それは彼らの教わった忍耐と彼らに備わっている内なる助けによって和らげられてしまい、十字架でさえ祝福に転換してしまうのだ。私はロチェスターに上記のことを考え合わせ、それが単なる作り事だと思えてならないのなら、一体どのような異議申し立てをするつもりなのかを考慮して欲しいと願った。利益というのは人間のあらゆる作り事に見受けられるものだが、我々の救い主はそれとは一切無縁だった。彼は賞讃を回避し、王冠の申し出さえ辞退したのである。彼は生涯、貧困と非難そして激しい反駁に身を委ね、最も屈辱的で苦痛に満ちた死を受け容れさせた。彼の使徒達もまた何も持たず、権力や富を求めたりすることなく、仮に自らが権力や富を利用したら必ず有罪宣告を下すに違いないほどの教儀を伝えたのだ。彼らは託された使命を次代まで留保することなく存分に言明していった。彼らは己の弱さを記録し、自らの手で具体的に示した者

さえたほどだった。彼らが改宗者から施しを受けたのは、自身の窮乏を補うよりはむしろ他の者に分け与えるためだったのだ。自ら見聞した事柄に確かな証しを与えることで、激しい迫害を受けるに違いないのを彼らは承知してもいた。彼らが見聞した奇跡を伝える時、キリストの復活や昇天或いは約束通りに聖霊を注いだことなどの目に見えるほど明らかなものについては、<sup>106</sup>多くの人々が欺かれようもなかった。さらに彼らは自ら驚異を為すことでその使命を果たしたので、大群衆は、肉欲や情欲を敵視しているのみならず三百年間圧迫され迫害を受けるために置かれた教義に改宗したのである。<sup>107</sup>しかもその間こころした勢いは数々の苦難の嵐を切り抜けたばかりか、それに耐えつつ莫大な数にまで力を増していったのだ。約六十年後、プリニウスは膨大な数に昇るキリスト教徒が汚れなき生を送っているのを見出し、或いはルキアノスでさえその激しい嘲笑の最中に、キリスト教徒の間に見られる慈悲、世俗的生活の軽蔑及びその他の徳に対して気高い証言を行なっている。<sup>108</sup>悪意の権化たる背教者ユリアヌスもそれと同様の体験を一度ならずしたほどだった。

仮に上記のことを天秤の一方に掛け、それに向けられた極く僅かな異議と較べたとしたら、一方がどれほど重く、他方がどれほど軽いか即座に分かるに違いない。それ故、新約や旧約のどこかしらのあら探しを手始めに、そこから全体に対して偏見を抱き、心を頑なにするのは誤った方法だろう。正しい手段とは、初めに全体を考察し、全体的視野を得た後でより個別的な事柄の探求を行なうことだ。ところが、あのように誤った連中は精神が機先を制せられて偏見の

言いなりになった挙句に、問題を公平に検証することなど出来なくなってしまうのである。

私がこのように述べたことの大半にロチエスターは同意したようだった。ただ一つだけ、彼はキリスト教の神秘教義に対する信仰について異議申し立てをした。自分の理解出来ないことや凡そ考えもつかないことを信じるというのは人間の能力の埒外である以上、それを信じる者などいるはずがないと考えたのだ。彼が言うには、神秘教義を信じるなどとは牧師のまやかしの道を開くことでしかなかった。その件に関し、牧師が人々を押え付け、意のままに捲し立て、難解な名称を持ち出した上でそれを神秘と呼ぶと、飼い馴らされた大衆はいとも容易に信じ込んでしまうのである。また、結婚という手段を取る以外、男が女を快楽の対象とすることを制限し、離婚という救済を与えていないのは人間の自由、不尽な重荷を背負わせたに等しいと彼は考えていた。牧師の務めと糧、及び彼ら聖職者に権力が与えられていると信じること等は一片のまやかしに過ぎないとも彼には思われたらしい。そして、理性に反することを信じない限り救われななどと、なぜ他人から言われなければならないのか、そう言ってもらったお礼として、なぜその人に報酬を支払わなければならないのかと彼は言った。こうした次第は、いつでもあれ私に耳にしたロチエスターのキリスト教に対する異議申し立ての全容だった。これに対し、私は次のように答えておいた。

神秘教義に関してだが、如何なることにも説明のつかない部分があるのは明らかである。獣や人間は如何にして母親の腹で形造られるのか。如何にして種は大地で芽生えるのか。如何にして魂は肉体



に宿り、作用し、これを動かすのか。如何にして我々はかくも多くの言葉や物の形を記憶に留め、思考や話をする際に容易に整然とそれらを引き出したり出来るのか。如何にして視覚と聴覚は敏速かつ明瞭なのか。如何にして我々は動くのか。如何にして肉体は組成され結合されているのか。我々がこうしたことを考えても、結局は難問過ぎて分からないと苦言を呈するだけなのかもしれない。だとしたら、これらは宗教における如何なる神秘にも劣らず説明の付かないことに思われてくるだろう。目や耳の不自由な人は視覚や聴覚を信じ難いと考えるだろうが、それは我々が神秘に対するのと同じことなのである。我々の理性には神秘を理解するだけの力量がないからだ。それと同様、年齢と能力の度合いの違いによって、ある人は他よりも遙かに勝っている場合がある。だから子供には学問の深さが測り知れないのだし、知力の足りない人はより啓発された心を持つ人の忠告を理解出来ないのだ。その段で、神の本質が我々に分からないのは不思議でも何でもないことだろう。魂と肉体という二つの全く異なった性質のものが如何にして結び付き、相互の事柄に影響し合うのか、また如何にして魂は一方で知的活動をするための理性という原理を持ち、他方で肉体と結び付き、生き生きと活動するための生命という原理を持っているのか、我々には想像もつかない。本性と作用においてこれほど隔たっているなら、この二つの原理が一個の人間の内に結び付いているのだから、この可能性を否定しようとする多くの厄介な論議が行なわれているのかもしれないが、誰でもこれが真実であることを思弁的概念によって知っているのである。この経緯は、聖書に言及されている神秘を否定することを狙う論議

に關しても当て嵌まるだろう。例えば三位一体の神秘がある。これは一個の本質の内に三個の作用原理があることなのだが、ただ的確に言い表わす言葉が欠いているために、我々はこれを三つの位格と呼び、聖書では父、息子、聖霊と名付けられている。また、これらの内の第二は自らをイエス・キリストの人間性と親しく一体化させており、その被った迫害は人類の罪を贖うものとして神に受け容れられたのだった。この時神は、彼自身の提示した約束に従う者全てに永遠の生を許可する力を彼に授けたのである。さらには、肉体を我々人間が生前纏っていたものと言い得るように、死に際して脱ぎ捨てるものと呼ぶのも正当なのだが、その肉体をかつて形成していた物質はより純化されて靈的な存在となって魂と再び結び付き、一層全き状態に置かれた魂にふさわしい手段になるのだという。また神は我々の魂と肉体に刻み込んだ印象によって、密かに我々の意志を支配し、動かすのだ。

これら、我々の宗教における主要な神秘教義は決して不条理なことではない以上、唯一我々の常識と合致し難いという点を除けば、如何なる反論も成立し得ないだろう。さらに全く訳の分からない話でもないはずなので、様態は理解出来ないが確かに存在すると信じている他の事柄を、今の場合同様に神秘という次元で考えることも許されるのではないか。神秘に対する我々の信仰の基盤が確固としている限り、様態が理解出来ないということは、充分把握出来ないものに理性を従属させている事象への正当な反論とはなり得ないのだ。確かに、神秘を説明するよりも一層闇に包んでしまうだけの、余りに煩瑣な論議が多く導入されたこともあった。頼りない論拠に

基いて弁護されたり、必ずしも適切かつ要領を得たとは言えない比喩で説明されたりもした。明らかにするよりも混乱させるだけではないような、微妙な論点が新たに付け加えられたこともあった。以上は全く否定出来ない事実なのである。古代には異端者の反駁が誘因となって、教父の間に余りに極端な綿密さがもたらされたのだが、それを後になってスコラ哲学者が驚嘆すべきほどに発展させたのだ。だが神秘教義が、弁舌巧みで空想好きな人間の手を煩わすよりは聖書で伝えられているような素朴な形で受け容れられるなら、日常的な感覚や知覚の対象の中にはもっと信じ難いものがあると思われるまでになるだろう。また新約で平易に述べられている神秘教義が一旦受け容れられたら、次には牧師が意のままにあれこれ付け加えたりするのではないかなどと不安がるのも謂れないことだ。様態を理解しないまま、神の本質に関する何らかの真理に同意する義務があるからといって、パンや葡萄酒のように感覚に具体的に提示された対象において、その対象自体が確かな証しとなっていないにも拘わらず、それを感覚の捕えた通りのものでなく、一片一滴に至るまでキリストの肉と血なのだ信じよう主張するのは愚かな推断だからである。<sup>119</sup>確かに、適切な作用を示す感覚や理性がその対象と釣り合っていて、器官も病気とか不調に陥っていない場合には、感覚や理性に逆ってまで信じるなど誰にも出来はしない。当然ながら神秘というのは、決して他の意味では合理的に解釈出来ないような聖書の記述の明快極まりない權威に基いて、初めて認められるものだろう。人間は神秘についての明確な概念を形成出来ないはずで、仮に出来たとしたら、それは最早神秘ではなくなってしまう

に違いない。だが自分ではその様態について具体的に説明出来ないにも拘わらず、或いはむしろ待ち構えている反論に答えられないにも拘わらず、概して人間はある事柄を神秘的だと信じられるものである。自らの及ぶ範囲内の人間的事象において、我は多くのそうした類のことを信じているはずだ。我々の理解を遙かに超えた神にまつわることに關して、それが出来ないというのは理不尽そのものではないか。

女性を弄ぶのを厳しく制限している件については、法を定める者としてのキリストに対し、彼より劣る全ての立法者の場合を考え合わせるなら、そうした制限を設ける特権を拒むのは無理な話だろう。彼ら立法者は臣民の享受している自由が害多きものだと判断すると、必要かつ適切と考えられる制限や規則を課するのである。ある場合については、例外的に欲望を抑える必要がないなどと言うことは出来ないはずだ。例えば肉欲の抑制が必要な局面では、これを確固たるものにすべく、他の制限もこれに劣らず導入されなければならない。妻や娘を己の財産として所有していることが容認されるのなら、その妻を汚し娘を墮落させるのはその人の財産に対する不正かつ不当な行爲となるからである。己の肉欲を注意深く律しない限り、人間はこうした制限条項を侵してしまふに違いない。それ故我々の救い主は、無軌道な肉欲の害毒からこの世を救う有効な手段は当の肉欲を制限する以外ないことを知り、これを課したのである。どのような場合でも、我々は各々不都合な点を両手で量って較べなければならぬ。そして、最も重く感じられるところに法の衡平を求めべきなのだ。一方の手には肉欲の制限以外、何も損害はあり得な

い。だが他方には、快樂に身を委ね、法外なほど快樂に走り、家では自らの家族の、そして外では他人の平穩を破り、激しい情欲に耽り、望みを遂げるために多くの不実で不敬なことを行なったりなどと、資産や時間、健康の浪費に他ならない害毒が居座っているのである。この時、前者の方が、後者の内どれか一つが禁じられた場合よりも大きな損害をもたらすのか否か判断してみるのが良いのだ。多重婚については、女性も男性と等しく婚姻の法に關与しているのだから、男性同様に考慮されて然るべきだろう。だが多重婚の下では、女性は悲惨と嫉妬に苛まれ、殘虐な扱いを受けるものだ。女性のみならず男性も人付きの良い性質を備えている以上、友情と對話が結婚の根源的な目的に含まれているのだし、結婚生活においても、夫が心の広さと知識の高さの点で勝っているのなら、妻は愛情と心の籠った世話でその埋め合わせが出来るだろう。従って両者が幸せに交わるところでは、有徳な心の人にとって人生最大の喜びの一つたる調和が生まれてくるのである。だが多重婚の状態からはこれら全てが消え失せ、ただ争いと嫉妬の機会しか与えられはしないのだ。また目先の変化といったものも男性をより放縱な快樂に向かわせるだけに過ぎなくて、これは他の局面に付き纏う遙かに大きな害悪に見合うことでは決してない。だからこそ、我々の救い主が人間の勝手な自由を制限した時、彼は明らかに人間の本性を考慮し、それが何に耐えられるのか、また何がそれにふさわしいかを判断したのであった。次に離婚についてだが、仮に自分達の意のままに別れることが許されるのなら、結婚の絆を断ち切るこの権利は些細な口争いをしていただけの夫婦さえをも徒らに刺激しかねないだろう。勝手に別れる

権利など全くなく、共に生き、共に死なねばならないことを夫婦が承知した時、彼らは自然に憤りを抑え、能う限り仲睦まじく生きようと努めるのだ。福音書の掟は愛の掟として、キリスト者に互いの愛を誓わせるように企てている。その愛を強め維持するためにも、争いを育み助長しがちな放縱な自由を奪うべきこうした規定が設けられるのは適切この上もないことだ。場合によってはこれが窮屈で厄介だと思われるかもしれないが、法というのは最も普通に生じることを想定しているのであって、個々の状況を必ずしも全て規定出来るとは限らない。最善の法でさえ、ある時には大きな悲しみをもたらす原因となることさえある。だが利点と不都合を天秤に掛けた上で、然るべき方策が取られなければならない。上記の事柄全てについて、快樂が他の非常に重要な考慮の対象と対立している時には決断を下すのは容易なはずだと私は述べておいた。しかも我々の救い主がかくも優れた報いを提供してくれている以上、この約束に我々の生来の傾向には余り嬉しくない条件を課しているのはまさしく理に叶うところではないか。気高い報いを差し出す者は皆、困難な行ないを強いる権利を所有しているからである。

これに対してロチェスターは、条件が厳しいのは確かに理解出来るが、報いについてはそれほど定かでもないと言った。そこで私は彼に、我々はキリスト教の他の部分に対するのと同じ確信をこの報いについても抱いているのだと述べた。キリストを通して為された神の約束が多く奇跡によって確認されたのを我々は知っている。我々はその兆しを善き良心に伴う平穩と安らぎにおいて、また我々の復活を約束したかの人が死者の間から甦ったことにおいて抱くの

である。それ故、報いは間違ひなく我々に保証されている。約束の爲される前提となつたはずの条件が遂行されるより以前に、報ひがもたらされるべきだといふ謂れは何もない。「嘘偽りなき神の約束された永遠の生を待ち望み」つつ、我々は神を信頼し、義務を果たすといふのがまさに理に叶つていたのである。そこに付随する困難は、極くありふれた人生の関心事が時折もたらすそれと較べても大したものではない。商売や学問を身に付けたり、健康と職務を司つたりすることはしばしば我々を難儀させる時がある。従つて、宗教には何か窮屈なところがあると思ふのは決して正當な予見であるはずがない。そうした予見はキリスト教の指令がもたらしたものと異なり、むしろ人間の墮落した本性が悪しき習いによつて一層悪化し、新たな生の道程に殆ど向い得なくなつた事態の爲せる業なのだ。キリスト教の指令自体は正しく理に叶つており、我々が生まれ変わつて原初の廉潔へ立ち返つた時には容易に従い得るはずに違ひない。聖職者の糧及び彼らの主張する權威に対してローチェスターが異議を唱えた点についてだが、彼らが己の目論みを余りにも極端に押し進めるならば、福音書は彼らを明確な言葉で咎めるのである。何しろ聖書はそうした類の行為を全て拒絶しているのだから、この面で罪深い教会が民衆の手から聖書を取り上げようとするのももつともだと思われる。だが眞のキリスト教の牧師とは、世の中に知られては困るような秘密を自分達だけで隠し持ったりはせず、ひたすら神に心を捧げ、聖なるものに仕えるべき人々から成る集団の一員なのである。しかも神の諸事を扱う者である以上、固有の徳の高さを備えていなければならぬ。そうした牧師に正當な敬意が払われ、適

切な生活の糧が充たされるのは欠くべからざることだろう。それによつて貧困に付き物の輕蔑から保護されるのだし、或いは貧困に陥らないよう施しを受けることで却つて別の意味で巻き込まれかねない心の逸脱状態から免がられるのだ。世俗の階層社会では君主や政体を支持したり、その名声を守るために、ある種の威儀を利用しなければならぬ(もつとも、偉大な人物がそうした虚飾を蔑視するほどの哲學的精神を所有している時は幸運といふべきだろう)。牧師の潤沢な糧も正しく有効に充てられるならば、確實に宗教に資するだろうと思われる。仮に野心や欲の深さから不正な手段を用いたり、卑屈にも追従したりして、威嚴ある地位を得ようと願ひ、一旦手中に収めると、富を贅沢や虚榮に注ぎ、或いは地位を利用して家族のために財を成そうとする輩がいるならば、それは個人の過ちなのであつて、キリストの教えとは何の係わりもないことだろう。

ローチェスターはこの時、私に向かつて率直にこう言つた。即ち信仰を持つてゐる振りをして、實際にもこれを公言しながら、決して真面目な人物だとは思われぬような生き方をしている輩ほど、彼自身や悪しき道に入つてゐる多くの人間に密かな勵ましを送つてくれたものは他になつたといふのである。こつ言つたのも、ローチェスターが宗教を単なる作り事かこの上もなく重要なものかといづれかだと確信していたからだ。だからこそ一旦自身が信仰を持つてたなら、それにふさわしく真面目に生きるつもりだつたのだ。彼が宮廷で目の当たりにした聖職者の高位を狙う野心と卑屈な手段、そして些細なことを巡つて生じる派閥同士の憎惡の故に、そうした輩は自分の説教や話の中で熱心に推奨していることを本心では

疑っているのではないかと思つたのも再三だつたらしい。この点に  
関し、彼は多くの事例を手にしてきたが、その中の幾つかは誤解な  
いし中傷に過ぎないことを私は知っていた。それでもなお、幾許か  
が紛れもない真実であるのを否定出来はしなかつた。今、この場で  
私はこうした事実を腹藏なく打ち明けておきたい。宗教心篤いと自  
認している人々、殊に聖職に専心している人々に、自らの職務にふ  
さわしい生き方をすべきだという大いなる義務を心して欲しいから  
である。さもなければ、我々の間に巢喰つている無信仰や無神論に  
従う多くの者共に、彼ら聖職者を攻撃する余りにも正当な理由を与  
えてしまふに違いない。邪悪な連中は聖職者の内に悪しき点を見出  
すと度を越した喜び方をするものだし、そこから聖職者を偽善者呼  
ばわりするのみか、宗教自体も欺瞞だなどという結論を下したりも  
するのだから。

しかしこの問題に関して私はロチェスターに、善き人は如何なる  
罪にも耽ることは出来ないはずでありながら、他の人同様誘惑に感  
化され易いのは確かだ、その暴力や急襲に打ち敗かされて突然、生  
涯の悲しみとなるほどの悪しき行為に走る場合もあり得ると言つ  
た。従つて、極く僅かな過ちを論つて、そうした人は自らを信じて  
いないのだなどと結論を下すのは不当な推断と言ふべきだろう。如  
何に多くの悪しき者があるうと、聖職者であれ平信徒であれ、世の  
中に対する軽蔑において、厳格な生活において、或いは書を許し、  
貧しき者を救い、如何なる時も善を施す心の用意が出来ている事実  
において、宗教の及ぼす力を大いに正しく立証してくれている人々  
も多いのは否定出来ないのである。ただ、そうした人々でさえ性向

に何かしら弱点があつたり、或いは誘惑が強烈で不意な時には過ち  
を犯すことがあるかもしれない。こうした場合全てに亘つて、我々  
は人間を、弱点があつたり不意を喰らつたりして陥りかねない過誤  
よりもむしろ生活の道程に基いて判断すべきだろう。

以上が我々の語り合つてきた主要な題目である。私は記憶してい  
る限り忠実に対話の実質を再現しておいた。ロチェスターの述べた  
強烈かつ大胆極まりない話さえも隠したりはしていない。この途轍  
もない事柄を述べる際に彼が見せた、機知の挑み掛かるほどの様子  
を詳細に伝えることは確かに出来なかつたが、彼の言葉に籠められ  
た力強さはそのまま完全に保てたはずだし、思い出せる限り彼自身  
の言葉を使用してもいる。それ故、悪行に耽つている連中がかき集  
めて自らを助長し弁護するのに利用しかねない事柄を、これほど多  
く書き記したことで非難を受けるのではないかと懸念されるところ  
でもある。だが、彼らがこうした途轍もない事柄とそれに対して述  
べられた答え、そしてかくも偉大で洗練された知力の持ち主が後で  
振り返つた時に抱いた想いとを較べるのだとしたら、神の祝福に  
よつてあなたがち無益なことにもなるまいと願う次第である。

#### 註

- (1) 本稿は Gilbert Burnet, *Some Passages of the Life and Death of John Earl of Rochester* (1680) の試訳である。訳出に当たつては *Rochester: The Critical Heritage*, ed. David Farley-Hills (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), pp.47-92 に収録されたものをテキストとしているが、この版で割愛されているへ序へについては、一七八七年ロンドンで刊行された W. Lowndes 社版に拠っている。

- (2) この記述通り、バーネットの代表的著作とされる *The History of the Reformation of the Church of England*, 3 vols. の第一巻が一六七九年に刊行された。なお、以降の巻は一六八一年、一七一五年の順で出版されている。一六八〇年六月二五日付の書簡を指す。なお、これは後に本文中でも紹介されることになる。
- (3) 『伝道の書』二・一〇を踏まえた表現。
- (4) ロチェスターは詩人としても Nicolas Boileu-Despreaux (1636-1711) 及び Abraham Cowley (1618-67) に多くを負っている。ちなみに、彼の代表作と言うべき『風刺 (A Satire)』がボワロの『風刺詩第八番』から直接素材を得ているのは周知の事実だし、優れた抒情詩の一つに付けられた『愛と生 (Love and Life)』という題はカウリーからの借用だと見做されている。
- (5) オウイテイウス『転身物語』七・二〇。なお、この箇所は田中・前田訳（人文書院 一九六六年）に拠っている。
- (6) この「靈感 (inspiration)」とは聖書筆記者の受けた聖霊の導きを指すものである。
- (7) 『士師記』第一章。
- (8) 『ヨハネ福音書』一一・一―四四。
- (9) 『エレミヤ記』二五・一一、『ユダヤ書』四五・一三など。
- (10) 『ダニエル書』殊に七、一一、一二の各章。
- (11) 共観福音書の各々で言及されているが、殊に『ルカ福音書』一九・四一―四四、二一・二〇―二八。
- (12) 周知の通り、旧約を通じてメシヤの到来が待ち望まれていて、『ダニエル書』七・二三では「人の子のごとき者」という語句を見ることが出来る。新約ではそれがイエスに他ならないとする証言が行なわれている（『マタイ福音書』一六・一六、『ヨハネ福音書』四・二五―二六など）。
- (13) 言うまでもなく、『黄金律』（『マタイ福音書』七・一二）及び『マタイ福音書』二二・三九、『マルコ福音書』一二・三一などを踏まえている。
- (14) サタンによる荒野の試みを指している（『マタイ福音書』四・八―一〇、『ルカ福音書』四・五―八）。
- (15) 『使徒行伝』二・三二―三三。
- (16) 三一三年、コンスタンティヌス帝の「寛容令」により、キリスト教がローマ帝国内で公認されることになった。
- (17) 所謂小プリニウス (Gaius Plinius Caecilius Secundus, 62?-C. 113) がトラーヌス帝と交わした往復書簡、及びルキアノスの『アレクサンドロス即ち偽預言者』等の作品に言及していると思われる。これに関しては『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局 一九八六年）を参照。
- (18) バーネットは英国国教会の聖職者として、「全質変化」ないしは「化体説」(transubstantiation) というカトリックの教義を非難しているのである。
- (19) 『テトス書』一・二。
- (20)